

ノ員

久保年録

同人書

印堂の碑

松林卯三年

二十六年

天保五年二月廿一日晚八時久保市より卯在の宅に突入其の
を切害同人書録へも負せりし印堂市并に父の歌を
討之遂に味し不之常事なりし心辨にせお遠く其を恨む
坊山河内を流く少庵中の坊内村に在る以て恒念令の書

怪石打怪火不燃

十市谷火津路橋板津路橋板 怪火 怪火 怪火 怪火 怪火
中旬より翌夜定あうく大小の礫を打撃し數千具又火燃上ん
とすりしやなす因毎夜に正夜隣ありし所一振りあり
始に煙立火氣流ししを之附とみ防けりてすもあはれは
在ぶりしと名いぬるやありけり中家老中多防はちより
隣家小善信但拙を言ふありやしきあひりれや遣し其ん
於印中此場をわす夜小善信此を記長井書りし由邊の上極系
るは風中あまなりあり篤と書れりト也時子長井由書り
左はりし篤實者并肝葉中付るに條止おはり老ふ文政十三子比
近西の書
を改る方程よりぬ風少するをさしとすと大和書後引也
物者て又い書らぬ由邊の上先刻中長和書りぬ由法とるる
又これ網とるるとも書らぬ其に銀使にや香とるりも口ぬるぬに
五経中篇に今いしや切論也しと人ん不定の如別依
かす時大切するぬと事子組三橋板古書り其板速又同なる
揚東上書りし振り中ゆりしと極系大よ事さきいし其怪者り
は市書りありしとてぬ清也後とて如く物物作の因大石
ひらかより打退の振り右の石を振ると入るとも入るとも節遠

天保五年二月廿一日晚八時久保市より卯在の宅に突入其の
を切害同人書録へも負せりし印堂市并に父の歌を
討之遂に味し不之常事なりし心辨にせお遠く其を恨む
坊山河内を流く少庵中の坊内村に在る以て恒念令の書

出づるは入りぬるを馬柳一又少色又い少づて三つあつたは
此れも也右身五人の形もまた一室中ぬるにありきれとね支
死の中より五人の塚系う完へ酒にみ紙をく茶菓茶を出し
後、送るにこそ再々、毎の世月、い多る、海月の人、如く右
身と年、川也あく十年と精効高下り、此と右の怪、在りや
ます、係火い、あ夜の介、先い、なみ、一、也

甲午比也一大小

十一 君仁徳至 諸民天保五得安穩

念んもあはれ小人まきくと

大君れあはれとて世にぬ神代のを

甲午試筆 白中批 大小

維天保定大平人時雨臘

晴先ト春已自遷鶯二三

轉五音調入八風新

又

小暖烟濃起四垣庭霜正

解覺風温草芽六七終啣